バカとAクラスと試験召喚戦争

LEN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとＡクラスと試験召喚戦争

【Ｎコード】
Ｎ３７４７Ｙ

【作者名】
ＬＥＮ

【あらすじ】
バカとテストと召喚獣の二次創作物です。小学校の頃離れ離れになったった明久の親友、長谷川芳樹はある仕事を学園長に頼まれ明久をＡクラスに・・・・。明久とオリキャラ芳樹を中心にＡクラスで馬鹿騒ぎをする、そんな話です
・・・今まで、書かせてもらっていたバカとＡクラスと試召戦争の一学期からスタートする作品です。よろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

今まで書いていた小説『バカとＡクラスと試召戦争』、もしくは『バカとテストと隣人部』を読んで下さっていた皆様、本当に申し訳ありませんでした！

色々あって自分の作品は全て削除されたのですが、また頑張って行こうと思います・・・・更新スピードはドンガメ確定ですが。

まあ様、糖分摂取魔様、バカと不幸様、ＧＡＵ様、活動報告へのコメントをありがとうございます。おかげで少しやる気が出てきました！

それではどうぞ！

プロローグ

季節は春、ある学園へと続くこの道には桜の花が満開に咲き誇っている。今日から生徒たちはまたこの道を歩き続けることになる。学園と聞けば勉強をするのが面倒で暗い顔をしながら登校する者少なくはないだろう。だがそんな顔でこの桜を潜る生徒は誰一人としていなかった。新しい友達と新しいクラスで新しい一年が始まる
そう、今日は始業式。・・・・世間で最も話題を呼ぶ新技術『試験召喚システム』をいち早く採用している学園・・・・・文月学園の始業式である。

「吉井、遅刻だぞ」

校門の前で、ドスの聞いた声で呼び止められる生徒が一人。時間が時間であるため走り続けた生徒はその声に立ち止まった

「あ、鉄じ――じゃなくて、西村先生。おはようございます」
「今、鉄人って言おうとしなかったか？」
「ははっ、気のせいですよ」

・・・・・ドスの聞いた声の持ち主である西村宗助教諭。生徒たちから生活指導の鬼と呼ばれる先生に対し立ち止まった生徒はいつも

の様にごまかす、

「それにしても、普通に『おはようございます』じゃないだろうが」
「あ、すいません、えーっと――今日も肌が黒いですね」
「・・・・・お前には遅刻の謝罪より俺の肌の色のほうが重要なのか？」
「そっちでしたか。すいません」

・・・・・・遅刻しているにも関わらず、教師に冗談を振るうことのほうが重要なのかと突っ込みたくなる気持ちはあるがこの少年は『バカ』であるからしょうがないと言えばしょうがない。１年生の時から仲間と一緒にバカを繰り返し、遂には『観察処分者』と言うこの学園で最も貼られたくないレッテルを貼られ、そんな中でもバカを繰り返す。これがこの少年――――学園至上の大馬鹿野郎、吉井明久だ

「まったくお前と言うヤツは・・・・・・いくら罰を与えても全然懲りないな」
「先生。僕、遅刻はあまりしてないですよ」
「遅刻は、な。ほら、受け取れ」

西村教諭は箱から封筒を取り出し、明久に差し出す。宛名の欄には『吉井明久』と言う文字が大きく書かれてある。・・・・だが、そこには少しだけおかしなところがあった。明久は一応頭を下げて西村教諭から封筒を受け取る

「あ、どーもです。・・・・それにしてもどうしてこんな面倒くさいやり方でクラス編成を発表しているんですか？掲示板とかでドーンと張り出したほうがどう考えても楽なのに・・・・」
「この学園には色々事情があるだろう？最近は大企業なんかでも少

しずつ使われてきている『試験召喚システム』だが元々の発信源はここだからな。ここだけが最先端システムを使っていたときの名残だ」

「ふーん、そういうものなんですかね」

適当に相槌を打って答える明久だが、内心ではすごくドキドキしていた。何故ならここ、文月学園は実力主義の高校でAクラスからFクラスまでのクラスは全て成績順によって決まる。つまり、より頭の良い者がAクラスでより頭の悪いものがFクラスということになる。

・・・・余談ではあるが、新技術『試験召喚システム』は大企業などで使われるようになった。仕事が捗ったりとメリットも多いのだが、かなりの資産が掛かりシステムの大量生産するのが現在の技術では難しく、使いたくても使えないと言う企業が増えてきているそうだ

「・・・・って、開いてある・・・・というか一回開けられてる？」

「吉井、今更なんだがな。俺は今までお前のことを馬鹿なんじゃないかと思い続けてたんだ」

「まあバカなのは認めますけど・・・・僕だってやるときはやるんですよ？」

「ああ、俺はどうしてお前がそのクラスになったのかが理解できない」

ってことは悪かったのかな？と、思いながら明久は封筒を開ける。

するとそこには・・・・・・大きなFの字が・・・・

×をつけられてその横に小さく、Ａクラスと書かれていた

「・・・って、えええ！？・・・・僕が・・・・・Ａクラス？」
「そうだ、俺としては信じがたいんだが・・・・・お前、何をしたんだ？」
「何も怪しいことはしてないですよ！！どうしてそう疑うんですか！」
「流石に冗談だ。お前がそういう待遇になった理由は聞いている。」
「待遇？、ってことは僕。誰かにＡクラスにさせてもらえたんですか？」
「そういうことだ。ちなみにお前の振り分け試験の結果は４９６点、学年で唯一５００点を切っていた。・・・・最後に言っておく」

西村教諭はもう跡に誰もいないことを確認したのか、箱を片手に持ち校舎に入っていく。途中で明久の方を見て

「どこのクラスになろうと・・・・・・お前はバカだ」

こうして学年最底辺の大馬鹿の、最高クラスでの生活が幕を開けた

プロローグ（後書き）

感想をお待ちしております

オリキャラ紹介＋今までとの違い

キャラ紹介

長谷川（はせがわ）　芳樹（よしき）

所属・・・文月学園２―Ａクラス
容姿・・・悪くはない、髪は濃い赤茶にストレート
成績・・・学年主席レベルで抑える
その他・・・明久の小学生時の幼馴染で、世界に数少ない神童の一人。
身体は細いが喧嘩も強く小学生の頃明久とともにやりたい放題やっていた。
両親は小学生の頃に死亡。現在は妹と二人暮らしで家事スキルも上々、基本万能
好きな物はこれと言ってなく一日が楽しければいいや程度。
過去については厳禁、

長谷川（はせがわ）　空（そら）

所属・・・文月学園１―Ｃクラス
容姿・・・兄とは段違いで良、髪は兄と同じ濃い赤茶で上のほうで束ねてポニテ

成績・・・悪くはない。・・・・・二年だとD～C程度
その他・・・芳樹の妹で現在兄と二人暮らし。
明久ＬＯＶＥで玲は攻略済み。その代わりに玲の影響を強く受けている

今までとの違い

・二学期から始まったのが一学期からになった
・明久×愛子じゃなくなるかも？
・瑞希もＡクラス入り
・あの人が・・・・・
・空が一歳老けた

オリキャラ紹介＋今までとの違い（後書き）

とりあえずこんなところでしょうか

これは随時新しい事実が出るたび編集していきます

第一問

「・・・・これが、・・・・Ａクラス？」

明久は教室の前で立ち尽くすことしか出来なかった。・・・・それもそのはず、目の前にある教室の扉だっけで明久の数倍はあった。横を見るとかなり奥に同じような扉とその隣に普通の教室の扉。配置からしてＤクラスだ。

「・・・・どんだけ大きいの？・・・・・立ち止まってもしょうがないしとりあえず教室に入ろう。」

扉を開けると、中の教卓？のところにここの担任であろう眼鏡を掛けた女性の教師と席？についている生徒全員が明久の方を見てきた。

「え、えっと何故かここに配属されることになった吉井明久です。よろしくお願いします・・・・」

「・・・・・・とりあえず、今からＨＲを始める所だったので席についてください。今は出席順に座ってもらってるので吉井君の席は一番奥の窓側の空いている席です」

「・・・あ、ありがとうございます」

何とかお礼だけ言って席に向かうが、生徒はみんな明久の方を向いている。去年の事を知っている者が入れば『何でお前が』のような目で睨み付けられたりする。一部の人は面白そうに見たりとそんな

プレッシャーに耐えながら何とか席に着く

「・・・それでは全員揃った様なので・・・・皆さん進級おめでとうございます。私はこの2年Aクラスの担任、高橋洋子です。よろしくお願いします。それではまず設備の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシートその他の設備に不備のある人はいますか？」

「（・・・・・こんな設備で、不満を持つ人なんているの！？）」

明久は突っ込みたい気持ちを抑える。実力主義とはいえ、AとDでこれほどの差があるのなら一体Fクラスはどれだけ酷いのだろうか少々気になってしまう。更に明久は周りを見渡すと、天井は総ガラス製でありながらスイッチ一つで開閉可能となっており、壁には格調高い絵画や観葉植物がさり気なく置かれていた。

「（それにしても・・・・Fクラスになる予定だった僕をAクラスに入れたのは誰だろう？流石に見知らぬ人とかじゃないよね）」

「参考書や教科書などの学習資料はもとより、冷蔵庫の中身に関しても全て学園が支給致します。他にも必要なものがあれば遠慮などすることなく何でも申し出てください。」

「（この冷蔵庫も好きに使っていいの！？、って支給！？そんな事言ったら僕の大好物のカロリーが！）」

「それでは初めにクラス代表と学年主席に出てきてもらいます。姫路瑞希さんと長谷川芳樹君は前に出てきてください」

「（へぇ～、姫路さんがAクラスの代表なんだ。・・・あれ？でも、

何で主席じゃないんだろう？クラスの中で一番点数の高かった人がなるんだよね。・・・・・今高橋先生なんて言ってたかな？・・・・長谷川・・・芳・・って）長谷川芳樹！？」

呼ばれた二人が前へ出ると、明久は思わず立ち上がってしまった。こればかりは周りなんか気にしていられない。気づいてしまった。

小学生の頃、いきなり目の前からいなくなった唯一無二の大親友・・・・・

「はぁ～、初っ端から調子を崩すなよ。・・・・・久しぶりだな、アキ」

長谷川芳樹がそこにいた

「・・・・吉井君。何やら感動の再開のようですがとりあえず後にして下さい。」

「あっ、す、すみません」

「長谷川君、今回あなたが主席じゃない事や吉井君がＡクラスになった事など、その辺りについての説明をお願いします」

「はぁ～、分かりましたよ。でもその前に・・・・姫路、代表として挨拶しろ」

「えっ、は、はい。・・・・この度Ａクラスの代表になった姫路瑞希です。よろしくお願いします」

あまり気乗りしていないのか芳樹はため息をついてから承諾すると、瑞希に紹介を先に済まさせる。姫路はいきなりだったので最初戸惑ったが、紹介を無事に済ませた

「・・・・それで俺が今回学年主席になった長谷川芳樹だ、二年生から転入してきた。転入してきたばっかで俺のことなんて小学校の頃一緒だった姫路とアキぐらいしか知るやつはいないだろうがとりあえずよろしく。・・・・・まず学年一位になった俺が代表になっていないのは、俺が点数を取りすぎたからだ」

「私も学園長からあまり話を聞いていないのですが、点数を取りすぎたというのはどういうことですか？」

「あのババァ・・・・高橋教諭ぐらいには話しておけよ全く・・・・。えーっとな、姫路の出した点数が確か・・・・４０２４点であってたか？」

「はい、そうですね。ただそれでも久保君と数点差だったらしくて・・・・。それに霧島さんが・・・・・テストにも出たはずなのに本

気を出さなかったからこの順位になれただけです」

姫路がそう付け加えると、クラス中が騒ぎ出す。Ａクラスの点数は確かに上は高いが下はそこまででもない。Ｂクラスの上位者と変わらない程度だ。しかしＡクラス上位十名はレベルが違う。その頂点で争っていたのが姫路瑞希、久保利光、霧島翔子の三人だった。しかし霧島翔子と呼ばれる女子生徒だけはこのクラスにいない。それはクラス全員が抱えてた疑問だった

「ちなみに霧島翔子はＦクラスに行った、なんでも体調が良くなかったらしい。途中退席で扱いってことになってる」

「えっ、そうだったんですか？」

「何でかは知らんが（まあ・・・・霧島の目的は、このクラスにいてもおかしくはないあいつだろうがな）、俺が叩き出した点数は・・・・６４３３点だ」

『『『６４３３点！？』』』

「どう考えても生徒が取れる点数ではありませんよ！？。一部の教師よりも高いじゃないですか！」

「それでも事実なんですよ、高橋先生。・・・・とまぁ、俺が点数出しすぎたせいで生徒で敵う奴がいる筈がないってことで姫路に代表は変わってもらったんだ。試召戦争は代表だけ倒せば勝ちだからな。下位クラスにもチャンスを与えるというわけで。ばば・・学園長としては実力主義なんだから別にどうでも良かったらしいが・・。・・・・・とまぁ、姫路に代表を任せるのはそういう訳だ。今は理解できなくてもいい、いずれ慣れるからな。ここまでで質問はある

か？」

芳樹がそういって手を上げるものは誰もいない。どれほど信じられない内容でもそれが事実である事には変わりないというのをしっかり理解しているようだ。・・・・・一人を除いて

「・・・・・アキ、質問は何だ？」

「いつ帰ってきたの？」

「今はどうでもいいな、後で話す。それで二つ目の話・・・・観察処分者である大バカのアキがここ、Ａクラスにいる理由だ。」

「えっ、なに、僕の話？」

「・・・・・お前はもう黙っておけ」

明久の回りからの視線がさらに鋭くなる。相変わらずのバカさ加減に頭に手を押さえ明久を黙らせる芳樹。・・・がここで何かを閃く。

「・・・ん？、いやまてよ。・・・・よし、アキ。お前も一回前に来い」

「どうして？」

「いいから、いいから。あ、高橋先生にも頼みが」

「なんか嫌な予感しかしないんだけど・・・・・・」

渋々、前に来る明久。もちろん、今でも回りからの目は変わってい

ない。明久が来る前に小声で高橋先生との話もつけ明久が前にくる

「よし明久、今から姫路と戦え。模擬戦争だ。高橋先生お願いします」

「総合科目、承認します」

「何でいきなりそういう話になってるの！？」

「お前に元から拒否権はないが・・・・今戦ってAクラスにい続けるのと、戦わないでFクラスに行くの、どっちがいい？あ、それと姫路も本気でやれ、別に模擬だから戦死の前で止めれば点数も戻るし問題はない」

「わかったよ、やればいいんでしょ！行くよ姫路さん！吉井明久、試獣召喚！」

「2年Aクラス姫路瑞希、試獣召喚！」

二人が叫ぶと、その足元には本人に似た可愛くデフォルメされた・・・・・召喚獣と呼ばれる非科学的な物体が現れた

「・・・・・さてと、これから俺を楽しませてくれよ。・・・アキ」

第一問（後書き）

感想お待ちしております

第二問（前書き）

長らく、更新が出来ずにいてすみません。

テストが終わったので第二問、更新いたしました

それと、少し第一問のほうを編集しました。と言っても姫路が途中退席をしたというところを変更したかったからです

それではどうぞ

第二問

「「試獣召喚（サモン）！！」」

明久と瑞希がそう叫ぶと、先ほど高橋教諭が展開した摩訶不思議なフィールドに本人たちを小さくしたような一見可愛らしい――――試験召喚獣が姿を現す

『二年Ａクラス　姫路　瑞希　総合科目　４０４２点
ＶＳ
二年Ａクラス　吉井　明久　総合科目　４９６点』

瑞希の召喚獣は細かい装飾のされた豪華な鎧を身にまとい、召喚獣自体よりも大きい剣を片手で持っている。一方明久の召喚獣は・・・・・改造された制服に木刀という、少し前の不良というイメージしか持てない様なちんけな装備だった。点数のこともあり明久に対する周りからの視線は一層冷たくなる

「「「・・・・・・」」」

「そんな目で一斉に僕を見ないで！、これでも頑張ったほうなんだ！」

「・・・・ある程度予想はしていたが、まさかここまで酷いとは思わなかった。まあ３５００点の差なんてアキなら楽勝だよな、というわけで頑張ってくれ」

「楽勝な訳がないからね！？」

「あの・・・・始めて良いんでしょうか？」

召喚したは良いものの、明久が芳樹と会話し始めてしまったせいで戦っていいタイミングがつかめず、瑞希はおずおずと手をあげながら言った

「おっと、すまなかったな姫路。本来なら奇襲をかけても良かったんだがお前の性格上しないで待ってたんだな。初めて構わない、さっきも言ったが全力で行け」

「分かりました！・・・いきますよ、吉井君！」

「ちょ、姫路さんま――――っ危な！」

「避けられちゃいましたか・・・・・」

「（へっ？、姫路さんってもしかして・・・・召喚獣の操作に慣れてない？）っ！、それなら！」

今度は明久のほうから仕掛けに行く。一気に近づいて木刀を振り下ろそうとする、瑞希はそれを剣で受け止めようとする。しかしその時すでに木刀は上になく、明久の召喚獣は鎧の隙間に木刀を叩き込み瑞希の横を通り過ぎ去っていた

『二年Ａクラス　姫路　瑞希　総合科目　３９９２点
ＶＳ
二年Ａクラス　吉井　明久　総合科目　４９６点』

ダメージを与えたことにより表示に補正が入る。明久としてはただフェイントを入れただけだったのだが、それすら出来そうにない周りのクラスメイトから感嘆の声が少しだが聞こえる

「（やっぱりあんなんじゃ、ちょっとしか与えられないか。だったら――）」

「そうだ姫路。言い忘れたかもしれないが腕輪は別に使って良いからな」

「あ、そうなんですか」「えぇ！？、そんなこと聞いてないよ！」

腕輪というのは単教科で４００点を超えたときに召喚獣につけられるもので、特殊な能力使うことの出来るものだ。総合科目の場合、５教科以上が４００点を超えると使うことが出来る。瑞希の召喚獣にはもちろん腕輪は装着されていた

「それなら――えいっ！」

「っ！・・・・ね、熱線！？」

「へぇ、姫路の腕輪は熱関係か。ってことは応用すれば――」

「外れちゃいました・・・・。それに点数も結構消費するみたいですから、ここと言う時に使えば良いんですね」

「（姫路さんの熱戦は前方向にしか飛ばせない。・・・なら、このやり方で大丈夫なはずだ）、腕輪にはちょっとびびったけど勝負はこれからだよ！」

先ほどのように近づいて木刀を構える。一斉に動き出す二人の召喚獣、瑞希は先ほどのこともあり下手に防御に回らずカウンターを狙う。鍔迫り合いが続き、大剣と木刀がぶつかり合う。
一呼吸タイミングをずらし明久は大きく木刀を振る、瑞希はそれを狙っていたかのごとく大検を横に払おうとした――しかし、明久が狙っていたのは瑞希ではなく、瑞希の持つ大剣だった。もちろんその事に瑞希や周りのクラスメイトが気づくことはない。・・ただ一人を除いて

「・・・・っ！そこだっ！」

「えっ！？――――きゃ、剣が・・・・・」

横に払おうとした大剣の進行方向にあわせ、明久は木刀を瑞希の腕に叩く。ダメージにより手を離してしまった剣を、跳んだあとに足で遠くに飛ばす。瑞希が剣を離された事に驚いているうちに明久は瑞希の腕輪のついている手をとって固め、首筋に木刀を突きつける。召喚獣といえどリンクしている人間がいるのだから、弱点は人の急所となる。人が即死するようなところに刺せば召喚獣も同じように点数は０になり消滅する。

「ふぅ、どうする姫路さん？下手に動くと木刀を突き刺すよ」

「うううう・・・・降参です」

「勝者、吉井明久！」

瑞希が負けを宣言するとフィールドは消滅し高橋教諭は声を上げる。すると、先ほどまで静かだったクラスメイトが少しずつざわめき始める

『・・・・吉井くんが勝った？』

『なんでだ、代表はまだ点数残ってただろ？』

『そもそも今の勝負はいったい何のためにやったんだ』

召喚獣の事は一年ではあまり習わないため、上記に書いたような知っている生徒は少ない。もちろん、明久を褒める様な声は一つもなかった

「さてと、勝負も終わったところで・・・・・とりあえず静かにしろ。まずは姫路が負けを宣言したところから説明していく。姫路は知ってたみたいだが・・・、召喚獣は人間と同じ急所があってそこにつかれるといくら点数があっても０点になって消滅するんだ。ですよね、高橋教諭」

「はい、現在ここで使われている召喚獣は人間のデータを元に作られていますので、自然とその体に弱いところというのが出来てしまうのです。例えば私たちが頚動脈を切られたり心臓を刺されたりしたら死んでしまう。それと同じことです」

「地味にグロテスクな例を挙げないでくださいよ・・・・・。と、まあさっき姫路が負けを宣告したのはそれが理由だ。あのまま続けたら木刀を首に刺されて補習室行きだったな。ここまでで疑問がある奴はいるか？。・・・・なら本題に移る。今ここで姫路とアキに戦ってもらったのはある事を証明するためだ。」

先ほどまでと気迫の違う芳樹に、席に座る生徒たちは思わずゴクッと息を呑む。

「アキがＡクラスにいる理由・・・・・、一つは今戦ってもらって分かったと思うが、召喚獣の操作能力の異常さだ。観察処分者というのは召喚獣にフィードバックによるダメージが追加されその召喚獣を使って教師の仕事を手伝わされる者のことを言う。一年生で観察処分者になったのはアキが初めてらしいが、・・・・それはつまり召喚獣の操作を一年多く出来るということだ」

『『『っ！？』』』

「さっきのアキの動きを良く見てた奴なら分かるだろう？。回避ぐらいなら少し戦争すれば身につけられるがフェイントからの高速での攻撃、攻撃のいなし方、・・・・こうやって操作能力しだいで、学年最低が学年最高に勝っちまうんだ。アキの召喚獣の操作力は学年最強だ」

『・・・・じゃあつまり、吉井君は観察処分者になったから・・・・・・一年間操作能力を磨くことが出来たからＡクラスに入ることになったんですか？』

気になることが出来たのか、一人の女子が手を上げて質問をする。芳樹はそれに対し・・・・

「そう思うだろ？。ところが違うんだな、確かに理由の一つではあるが・・・・・あくまで一つなんだ。・・・・・そうじゃなかったらアキは、・・・・バカとは呼べないんだな」

そう質問されることを先読みしたのが当たり、少し笑ったような表情でそう答えた

第二問（後書き）

出来れば明日も更新しようと思っております。

分量が色々日によって変わっていきそうなんですが、気にしないで呼んでいただけるとうれしいです

読んでくださってまことにありがとうございました！、感想お待ちしております

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3747y/

バカとAクラスと試験召喚戦争

2011年11月27日00時52分発行